「マジ？」学習プリント3　2の生徒のみなさんへ
二年5組　番

文化七（一八一〇）年に四代目鶴屋南北が書き下ろした歌舞伎狂言『当穐八幡祭』の中に、「マジな心を知りながら……」というせりふがあるのだ。この芝居は、昨今めったに舞台にかけられる演目ではないから、私は未見なのだが、以前芝居好きのご老人が歌舞伎役者の声色をまねて、そう言っておられるのを聞いたことがある。

思い当たって小学館の『国語大辞典』を引いてみると、「まじ」の項に、例文としてまさに『当穐八幡祭』が載せられているではないか。全く年寄りはありがたい――ともかく、完全同意の用語でないにしても、「マジ」の起源は江戸中期。そこでさらに語誌をたどったところ、どちらかといえば「まじ」の方が「真面目」の語源にあたるとも解釈できる事象に行き当たった。

そもそも「真面目」は、「まじまじとした目」の意味で、「まじまじ」とは、心の動揺などによってしきりとまばたきをする様子を表した副詞である。平安の昔から、まばたきのことを「まじろぎ」（目白き、目退き、などいくつかの語源説がある）と言うが、それを重ねて、より意を強調したものだろう。

つまり、びっくりしてまぶたをしばたたかせて、思考停止状態に陥った目の形容が「まじまじ」であり、そのような目をさす言葉が、本来の「真面目」であった。

整理すれば、近世初期ごろに言葉として成立したらしい「真面目」は、古代の伝統にのっとって正しく用いれば「まじろぎ目」であるところを、中世ごろに出現したと思われる「まじまじ」の影響を受け、略語の形で誕生した。やがて「真面目」という言葉は、そこに内含された「真剣な顔つき」という部分に焦点が当てられるようになり、「本気」とか「真剣」という意味に使われることが多くなり、今日に至ったのである。ゆえに、現代漫画で「本気だぜ。」に「マジだぜ。」とふられるルビの起源は、「真面目」の二次的語意に発していることになる。

A「文化七（一八一〇）年」に書き下ろされた歌舞伎狂言に「マジな心を知りながら……」といったせりふがあることが述べられているが、このころはどういった時代であるか簡潔に説明せよ。

徳川家斉が将軍であり、化政文化と呼ばれる江戸を中心とした町人文化が花開いた時代。

『当穐八幡祭』＝できあきやわたのまつり

B「思い当たって小学館の『国語大辞典』を引いてみると」

とあるが、筆者はどんな目的で辞書を引いたと考えられるか。

言葉の意味を調べるためではなく、その言葉がどのような資料で用いられているかを用例によって確認するため。

C「平安の昔から、まばたきのことを『まじろぎ』（目白き、目退き、などいくつかの語源説がある）と言うが」（5行）とあるが、これについて以下の問いに答えよ。

①「まじろぎ」を使った短文を作る。

彼の顔を私はまじろぎもせず見つめた。

②「目白き、目退き」が「まじろぎ」の語源説であるとはどういうことか。

「目白き」は、光で目がくらんで視界が白くなりまばたきをする様子からと考えられる。「目退き」はまばたきをして直視できない様子からと考えられる。

まとめ　（真面目の語意の変化）

一次的語意＝
まじろぎ目の略語

↓

二次的語意＝
真剣な顔つき→真剣、本気

内含（ないがん）＝内側に含まれている

ルビ＝ふりがな